



志村さん、コロナ急死の教訓

(3月30日～4月5日)

新型コロナウイルスに感染し、治療を受けていたコメディアン志村けんさん(享年70)が3月29日、亡くなった。日本の喜劇王の復活を信じていた人は少なくないだろう。だが、実際は入院前から厳しい状態だったようだ。

「週刊新潮」と「週刊文春」の記事をつなぎ合わせると、急激に病状が悪化したことが分かる。時系列に沿って見ていこう。

体調に異変があったのは同月16日。フジテレビで番組の収録があった志村さんは「到着直後から明らかに体調不良」。楽屋で「気持ちが悪い」と言い出して収録は中止に。車いすで局を後にした(新潮)。

文春によると、このとき志村さんは「足をけがしたという理由」で帰宅している。恐らく周囲に心配をかけまいとしたのだろう。車いすに乗ったのは、本当に具合が悪かったからかもしれない。志村さんは倦怠(けんたい)感を覚えていたという。

そして19日、家政婦が志村さんの自宅を訪れると、発熱や呼吸困難の症状が出ていた(文春)。翌日、往診した主治医は「普通の風邪ではない」と診断(新潮)。「サチュレーション(酸素飽和度)がかなり下がっていて、すぐに救急車を呼ばなければならない状態」。意識はあったが、ほぼ話せなかった。そこで病院に搬送され、「重度の肺炎」と診断されて入院した(文春)。

しかし、病状は悪くなる一方で、23日に転院。ここでコロナ陽性と判明した。意識をほぼ失っていた志村さんは「すでに人工呼吸器を使える状態ではなく、最終兵器のエクモ(体外式膜型人工肺)を使う状態」。結局、意識は戻らなかった(新潮)。

文春によれば、志村さんは2016年に肺炎で倒れて以来、大好きな酒を控え、1日1時間のウォーキングを欠かさなかった。高齢とはいえ、そんな元気な人でも最初の兆候から約2週間、エクモをつけてから6日間で帰らぬ人となった。新型コロナを甘く見るな。喜劇王のラストメッセージからはそんな声が聞こえる。

ところで、新型コロナ対策で政府が緊急事態宣言を発令すれば、東京都はロックダウン(都市封鎖)に踏み切るだろうか。「週刊SPA」では、元都知事で作家の猪瀬直樹氏が「東京でそれは不可能だ」と断言する。なぜなら、東京はロンドンやパリのように城壁都市ではないからだ。欧州は都市の中心から15分も電車に乗れば、田園地帯が広がり、都市と都市の境界が明確。対して東京は切れ目なく近県とつながり、人々が行き交う。猪瀬氏は都だけでなく首都圏で対策を講じる重要性を強調している。

「週刊ポスト」は「ああ、『テレワーク』が大変すぎる!」という記事。新型コロナの感染拡大で在宅勤務が増えている。同誌がクスリと笑ってしまうような実情を紹介する。

例えば、20代OLは化粧をしなくなり、「一日中寝間着のスエット姿」。40代男性は、会社から貸与されたパソコンで映画を見ていたことがばれて上司から大目玉。共働き世帯で子供の面倒を見ていた30代男性は、テレビ会議中に子供が「パパ〜!」と抱きついてきて…。海外では定着しているという在宅勤務は、日本では問題が山積みだ。(フリーライター・花崎真也)